

きずな

東天満 進

「ちよつと見てもらえないかな。これはなんだろう。北側の六畳の天袋の奥にあつたんだけど……」

息子の浩介が、メートルほどの長さの細長い包みを両手で捧げるようにしてベランダに出てきた。程近い戸塚に別居している浩介と嫁の恵理が月に一、二回、土曜か、日曜に五歳になる孫の雄太を連れてやってくる。その時を利用して、妻の由美子は、夫には無理あるいは危険と判断した力仕事などを頼むようにしている。

「刀らしいけど、母さん中は見たことないと言っし……」

その時、走り寄ってきた雄太が、包みの端に手をかけて引っ張った。

「僕にも見せてよ」

舞い立った埃が煙のように風に流れた。

「ちよつと待ちなさい」

恵理は、慌てて雄太を引き止めると、急いで持ってきた古新聞をベランダに敷いた。その上に袋包みを横たえて、乾いた雑巾で丁寧に埃を払い落としてゆく。下から紺の地色に白抜きされた唐草模様が現れてくる。秋山清の脳裏に、暗い電灯の下で大風呂敷を縫い合わせてこの上袋を作ってくれた母の姿が浮かんできた。

袋の中身を忘れるはずはなかった。清は、デッキエアに腰を下ろしたまま、揃えた両膝の上に置いた袋の口紐をほどいた。

中から刀袋が現れた。袋地は錦である。錦とはいうものの、終戦一年前の昭和十九年ごろに作られたものだから、緑の唐草模様を織り出した萌黄の地に、小さい楕円形に図案化された竜と雲とを交互に等間隔に金糸で織り出しただけの粗末なものにすぎない。その金糸も、輝きを失って黒みがかった茶色に変色してしまっている。

袋の上端を柄頭のところまで折り返し、房のついた紫の紐で柄元に巻き締めたのは、昭和二十五年、八十三歳になった祖父から、この刀の甲いを託された時だから、もう五十四年が経っている。あの日から現在までの間に、清は、仕事の都合もあって、二十六回も転居を繰り返した。その間も、この刀袋の包みは持ち歩いた。だが、その間、一度も袋を解いて中身を確認してみようとしたことはなかった。この公団住宅に入居してからでも三十三年が経過している。転居のための荷造りの折などに袋

を目にすると心が波立った。その度に、申しわけのなさど、後ろめたさの混じりあったような感情が、袋を開いてみようとする清の手を引き止めた。そして、使用する度合いのもつとも少ない荷物類の一つとして、いつも天袋や戸棚の一番奥に仕舞いこむことを繰り返してきた。

清は、刀袋を膝の上に載せると、巻き締めた紫の紐を解いて、中から日本海軍の長剣の仕様に改装した刀を取り出した。長剣には、柄頭先端の兜金から鞘の先端の石付きまでの間に様式に従って数個の金具が使われている。その金具類は、六十年に近い年月を手入れ無しにすましたとは思えないほど金色の光沢を保っている。だが、鞘に覆われている内部の鉄の部分には半世紀に余る歳月の間の赤錆が層をなしているに違いない。清は、鮫皮が巻かれている鞘を左の掌に横たえ、刃先を上にし、右手で柄を握り締めた。だが、これから出現するに違いない光景を想像すると、鞘を払うことがためらわれた。

*

家に伝わる十二本の刀や脇差のうちから、日本海軍の長剣の仕様に改装したこの刀を祖父から贈られたのは、昭和十九年七月に海軍兵学校の夏期休暇で帰省した折のことだった。

祖父は、蔵の中から代々伝わってきた十二本の刀や脇差を運び出してくると、座敷に敷いた帆布の上に並べた。

「重太郎からも、その時がきたら、一番良いのを持たせてくれと頼まれておる。お前が好きなのを持ってゆけ」

清の父の重太郎が病身のこともあって、刀の管理は祖父が受け持っている。

清が細身の軽そうなのを選ぼうとすると、

「これにせい。無銘だが、わしが一番好きな刀じゃ」

祖父は、清がこれを持ってゆくのは当然のことだともいうように、自分の正面に置いてある幅広の刀身の頑丈そうな一振りを取り上げて手渡してくれた。

「言い伝えによると、元はもつと長かったものを、実戦に使いやすいようにすりあげて短くしたらしい。反りも少なくなっているから長剣にするのにちょうどよいだろっ」

清の両手に、ずっしりと刀の重みが伝わってきた。

海軍兵学校第七十四期生のうちの清を含む航空要員約三百名は、卒業四ヶ月前の

昭和十九年十二月から、霞ヶ浦海軍練習航空隊で飛行訓練を始めた。卒業式は霞ヶ浦で済ませ、訓練基地を北海道の千歳へ移して六月十三日に練習機教程を終えた。翌十四日から実用機教程に進み、戦闘機専修組は千歳基地で、艦上爆撃機専修組と艦上攻撃機専修組とは美幌基地で、陸上攻撃機専修組と偵察専修組とは女満別基地で、それぞれ訓練を開始した。だが、戦局の逼迫、航空燃料の欠乏、訓練に充当する実用機の不足などのために、実用機教程を継続することが困難になった。この事態に対応するため、七月一日からは、九三式中間練習機(赤トンボ)による特攻訓練組、ロケット戦闘機秋水の搭乗員養成のための特殊機訓練組、地上教育組に分かれて訓練を進めることになった。こうした変動の最中の七月十五日、清たちの海軍少尉任命が発令された。

八月十三日になって、訓練にまわせる燃料がようやく入荷し、女満別基地では同日から飛行訓練を再開した。八月十五日の『終戦の詔勅』の放送があった後も続けられていた飛行訓練も八月十九日をもって打ち切られ、翌日には女満別基地の全航空機のプロペラが取り外された。

一方、飛行訓練と平行する形で進められていた復員業務も八月末にはおおむね終わり、後には飛行学生とその教官のほかには、飛行機や兵器などの米軍への引き渡し要員であるわずかな人々が残っているだけになった。

学生たちは、衣服や身の回りの物品は行李に詰めて女満別駅から手荷物で生家などへ発送した。届くかどうか分からないと受け付けの駅員もたよりなげであったが、それは覚悟のうえのことだった。困ったのは長剣の処置である。やむを得ない場合には処分を任せるといふ条件で、下宿屋や知人などに預けた者も多かったが、清や野上のように、何とかして持って帰りたいという者も数人いた。野上と清とは兵学校一学年の時に同じ分隊だったが、偵察専修組でまた一緒になった。清は、野上と相談しながら、できるだけ刀と分かりにくいような荷造り方法を工夫した。長剣とほぼ同じ長さに折り畳んだ毛布で周囲を巻き固める。別にシートで細長い袋を二個作り、急場用に支給された白米を一升ずつ詰める。この長剣と米袋二本をまとめてシートで包み込んで固く縛り、肩に掛けられるように担い紐を付けた。

女満別基地の教官と飛行学生とが復員の途に就いたのは九月七日の早朝だった。清は、長剣の包みと弁当などの当座の身の回り品を入れた雑嚢を右肩に掛け、航空関係の図書などを入れた中型のトランクを左手に提げた。

一行は、同日夜、千歳駅に到着し、母基地で一夜を明かした。

翌朝、食事を終えて、久しぶりで千歳組、美幌組のだれかれと挨拶をすますと、後は特にすることもないまま、指揮所の前まで行ってみた。空は晴れ上がっていて、

日差しはまだ夏の強さを残しているが、風の気配には紛れも無く秋の到来を告げる涼気が含まれている。東方遙かに連なる夕張山地や日高の山並み、西方に横たわる恵庭岳や樽前山の姿は以前と変わるところはなかったが、広大な飛行場地区には一機の飛行機も、一人の姿も無く、森閑としている。

兵学校二年の時に同じ分隊だった本多が墜落して殉職したあたりに向かって黙祷を捧げていると、「飛行学生集合！」を告げる叫び声が聞えてきた。

「明朝、米軍先遣部隊が飛来することだ。我々は、準備でき次第この基地を出て、第三千歳基地へ移動することになった」

集合した一同に当直学生が告げた。

慌ただしくトラックで運ばれた先は、基地とは名ばかりで、千歳飛行場の北西に当たる小高い丘の中腹に造られた防衛陣地跡である。急造された陣地の半地下式の小屋には照明設備も無く、夜は焚き火の明かりが頼りであった。心ははやって、青函連絡船に乗船する順番が来るまでは、この山小屋を動くわけにはゆかない。毎食乾パンの生活が始まった。

翌九月九日の昼過ぎ、久しぶりで爆音を耳にした。飛来したのは一機のB26だった。四発の重爆撃機は、銀白色の巨体をまるで戦闘機のように軽々と傾けながら、飛行場の周囲を旋回している

「一〇〇オクタンの飛行ぶりだな」

野上がつぶやいた。悔しさがにじんでいる。

一周を終えたB26は、次第に高度を下げて、眼下に見える滑走路に着陸した。

つい先日まで、日本海軍の北海道における最大の基地であったこの飛行場に、日本の多くの都市を焼き払ったB26に単機で乗り込まれても何の手出しもできない。まるで、戦争に負けるといふことはこういうことなんだ、と展示して見せつけられているようである。

六日目の十三日になってようやく青函連絡船に乗る順番が来て、山ごもりを引き払った。千歳駅から乗車し、十四日朝には函館に到着した。だが、前夜から雨模様であった天候がいよいよ悪化し、函館一帯には暴風雨が吹き荒れている。埠頭付近は乗船できない復員兵でごったがえしているが、連絡船は出港できないという。

やむなく、飛行学生たちは、付近の国民学校の講堂を借りて一夜を明かした。翌朝になってもまだ風雨は衰えず、出港の見通しが立たない状況が続いている。埠頭まで様子を見にいってきた野上が、米を出せば握り飯を作ってくれる旅館が近くにあることを聞き込んだ。今のうちに弁当を準備しておくことにして一緒に行っ

てみると、すでに十人余りが並んでいる。台所の竈かまどでは、五升と三升は炊けそうな二つの大釜が盛んに湯気を噴いている。間に合うかなと心配していると、順送りになっているらしく、米と引き換えにどんどん握り飯を渡している。二人は翌日の分を考えて、五合ずつを出して握り飯に換えた。

連絡船樺太丸に乗り込んだのは、その日の午後三時過ぎだった。飛行学生たちに割り当てられたのは、上甲板から数段降りた元は船倉だったと思われる荒れ果てた大部屋だった。しかし、先客がいた。陸軍の復員兵たちが大きな荷物を所狭しと並べ立てて場所取りをしていて、割り込む余地はなさそうだった。九月中旬の暑気と満員のいきれで、汗が筋になって背中を流れ落ちるのが分かる。

「甲板へ出ようか」

「俺もそれを考えていたところだ。こんな状態は長くは続けられないぞ」

野上もすぐに賛成して上甲板に上がってみると、人影はまばらだった。海上を吹き渡ってくる涼風が、息が詰まるようであった船底の熱気を忘れさせてくれる。

午後六時過ぎになって、樺太丸はようやく岸壁を離れた。函館山をかすめるようにして飛ぶ雲の流れはまだ速い。上甲板は、いつの間にか、新しい乗船者や暑熱に耐えかねて船室から上がってきた人と荷物で、足の踏み場も無くなっている。函館山の陰を出ると、船は大きく揺れ始めた。風は弱まっていたが、尻屋崎の方から大きなうねりが入ってきており、津軽海峡の中央部付近では白波が立っている。船体がかき分ける波の砕ける音が、時に高く、時に低くなる中で、エンジンの単調な震動が伝わってくる。

突然、その時、ぱっと周囲がまぶしい白光の中に照らし出された。先ほどまで、航海灯の淡い光でその存在だけが分かっていた野上の顔や、甲板上にごろ寝をしている人の姿や無数の荷物が、白日下のように照らし出された。

「何だこれは！ これはいったい何だ！」

「どうしたんだ！ 何があったんだ！」

人々は口々に叫びながら、広げた掌でまぶしさを防ぎながら立ち騒いだ。

光の輪は、甲板から煙突へ移動し、次はブリッジを照らした。さらに船首から船尾まで、船体の各部を嘗めるように闇に浮かび上がらせてゆく。

ふつと、また突然、光芒がかき消えて周囲が元の暗さにかえった。すると、彼方の闇の中から、灯火が点滅して発光信号が送られてくる。

「米軍が津軽海峡の哨戒をやっているのかもしれない」

野上が言う通りだろうと清も思った。

樺太丸は、エンジンを停止して漂泊を始めた。

「ブリッジでは停船命令があったと言っている。アメリカの軍艦だそうだ。臨検があるかもしれないことだ」

慌ただしく帰ってきた隣りの男が、仲間に声高に話している。

「武器の搜索だろう」

「どこか軍刀を隠すところはないか」

信号が終わると、また照射してきた。

「よほど緊急なことでもないかぎり、こんな大きなうねりのある暗夜にボートを降ろして臨検隊を送るなんてことはしないだろう。長剣を沈めるのは、やつらのボートが着いてからでも遅くはあるまい」

「もしも臨検の必要があるのなら、青森に入港してからにした方が安全で、確実にできるはずだからな」

だが、油断はできない。清と野上は、長剣の包みをいつでも投げ込めるように膝の上に抱えたまま、近づいてくるボートはいないかと、目をこらして海上を見張り続けた。そのうちに、船体を船首から船尾へ、船尾から船首へと照射を繰り返していた光芒がふっと消えた。海上はまた元の闇に戻った。樺太丸はエンジンを起動して動き始めた。

青森港に到着したのは、夜中の零時過ぎだった。列車の出発は、朝の八時以降ということだが、はっきりしたことは何も分からない。船を下りた人々は、駅前の広場で横になったり、荷物に腰を掛けたりして夜明けを待った。中には、飯盒で飯を炊いている者もいる。

空が白むころになると、北海道へ向かう人々も加わって、青森駅の人込みはますます激しさを加えてきた。下り列車の乗客がもたらすのだろうが、様々な噂話が格別努力をしなくても耳に入ってきた。

「東京や横浜には米軍が進駐して勝手気侷（まがまが）にやっており、治安状態が極めて悪い」
「乱暴された婦女子の死体が、裏通りや郊外に無造作に投げ捨てられたままになっている」

「不審な点有りと認められた復員軍人に対しては厳しい取り調べが行なわれており、何人もの将校や憲兵がその場から連行されてゆくのをこの目で見た」

等々の類である。それらは、「東京から帰ってきた人に、今し方聞いたばかりだ」とか、「この目で見た」などという前置きや注釈をつけて真剣な面持ちで語られると、いかにもその通りだろうと思われるものばかりである。

相談の結果、東京以西へ行く者は、裏日本回りに路線を変更して夫々の故郷へ向かうことにした。

清や野上たちが乗り込んだ列車が青森を出発したのは、九月十六日の昼過ぎだった。始めからひどく混雑した。級友数名も同じ車両に乗ったはずであるが、野上の他は確認できない。一旦は席を確保した野上と清も、幼児と少女を連れて困り果てている母親に席を譲ってからは、再び腰を掛けることはできなかった。二人は、列車が動き始めてから、ようやく見つけた透き間にトランクを割り込ませ、その上に腰を下ろした。

秋田駅に到着すると、またも群衆が列車に殺到してきた。数名が窓から先に荷物を投げ込むと同時に無理矢理に乗り込んでくる。その強引なやり方に憤慨した乗客が「荷物を投げ返せ!」「早く窓を閉める!」と怒号して立ち向かう。

ほっとしたのはつかの間で、今度は大きい荷物を背負った一団が、大声で叫びながら乗降口目掛けてに殺到してきた。

乗降口はすでに立ったままの乗客で一杯になっている。将棋倒しになった乗客たちは口々に怒号しながら強引な割り込み客を押し返す。ようやく発車の汽笛が鳴って、列車はまたのろろと動き始めた。やれよかつたと思う半面で、乗り込めなかった人々のことを考えると、清の胸に苦い思いがこみ上げてきた。

夜が明けてみると雨になっていた。列車は順調には走らない。一時間前後も停車している駅がある。用便が一仕事だった。清と野上は、三人を窓から出入りさせて用を足させた。

ようやく列車が富山駅に滑り込んだ時、浩は、車窓の風景に思わず息を呑んだ。黒い棒杭のような焼け残りの柱が点々と雨に濡れているほかには何も無かった。これまでにも被災地を通過してきているのだろうが、窓が荷物でふさがれたりして、被害状況を目にしたのはこれが初めてだった。福井でも同じような光景を見た。清には、戦士として出ていったにもかかわらず、戦わないままで帰ってゆく我が身が、ひどく申しわけないもの思われてきた。

列車が京都駅のホームに到着したのは午後八時少し前だった。三重県へ帰る野上とはここで別れなければならない。二人は立ち上がると手を固く握りあった。多くの人々が下車した。野上の後ろ姿は、下車が終わらないうちから殺到してくる乗客の群れの陰になって、すぐに見えなくなってしまった。急に淋しさが膨れ上がってきた。

午後九時過ぎに、列車は大阪駅に到着した。これが大阪駅かと疑われるほど、明かりが乏しかった。ほの暗い灯火に照らし出された駅舎の周りのごみ屑を太い雨脚が叩いている。岡山行きの列車の発車時刻を駅員に尋ねると、山陽本線は不通にな

つていると言つて、掲示板の台風情報を指差した。

『九月十七日午後三時現在、熊本付近に上陸した台風のため、九州地方は

既に暴風雨となつており、中国、四国地方も風雨がかなり強まりつつある。』

困つたことになつたと清は思った。徳島県南部に在る生家に帰るには、大阪港から小松島港へ渡るのが最も便利である。だが、B.C. によつて敷設された機雷のために、大阪湾の航路は閉鎖されたままだ。したがつて、故郷へ帰る手段としては、宇野から高松へ渡る方法しか残されていない。

駅の構内は薄汚れた国民服、よれよれの作業服やもんぺ、軍服など、雑多な衣服を身に付けた人々や復員兵でひしめいていた。ほとんどの人が、大きな荷物を背負つたり、提げたりしている。大坂から西へ行こうとする人々は、皆殺気だっている。列車が到着する度に、構内の人の群れが増大し、駅員との口論がもう何度も起きていた。雨脚は強かつたが無風に近い状態なので、台風が来るといふことが信じられないのだ。

事情が分かつてくると、「汽車を出せ」と喚いていた人々の怒号も何時しか消えた。行く当ての有る人々は次々に駅から消えていったが、そうでない者は、なお構内を右往左往している。清もその一人だつた。

ばたばたしても仕方がない。鉄道の状況は、駅にいれば一番早く分かるはずだ。清は、駅の構内で夜明かしすることに決め、二階への階段の上がり口の脇にある人通りの比較的になすなような一角を寝場所に選んだ。雑嚢の中に入れてきた海軍の黒風呂敷を敷き、雑嚢を枕に横になつた。トランクは体の右脇に置き、その上に長剣の包みを載せた。

動き回っている時には紛れていた体のかゆみが耐えがたいほど高まつてきた。熱もあるようだ。みみずばれのようなものができているので、蕁麻疹じんましんに違いないと思つた。車中で食べた糸を引いていた握り飯が、鯛の缶詰のせいかもしれない。

ぎよつとして清は飛び起きた。背中、腰と、体の背面全体に異様さを感じた。一瞬、何が起つたのか、ここが何処であるのか、見当がつかなかった。何時の間にか眠つてしまつていたようだ。水だ。周囲は暗闇だ。停電したらしい。外では暴風が唸り、がたがたと建物全体を揺すっている。トタン板か何かが吹き飛ばされて、けたたましい金属音を立てながら、遠くなってゆく。豪雨が激しく建物や大地を叩いている。清は、ようやく自分が置かれている状況に目覚めた。暗闇の中で手探りで風呂敷を拾い上げ、水気を絞つて畳んだ。右肩に長剣の包みと雑嚢を掛け、左手でトランクを提げた。あちらこちらでうるたえ騒ぐ声がする。大阪駅が水につかつ

ている。しかも、次第に水位が上がってくる。はや足首付近まできている。

「火事だ！ 火事だ！」暗闇の中で叫び声がある。ほのかに明るくなっている出入口と思われる方向へ水の中を用心しながら近寄っていった。これだけの人がどこにいたのかと思われるほど多数の黒い人影が黙々と集まってくる。

先着者の肩越しに外を見ると、二百メートルほど離れたところで大きな火の手が上がって、火の粉が激しく暗闇に吹き飛んでいる。激しい雨脚が手前のバラックの屋根や電柱の黒いシルエットにしぶいている。時々、火のついた板切れやむしろのようなものが、火勢と強風にあおられて吹き飛んでいる。火勢も衰えてきたので元の所に帰ってきてみると、すでに他の人たちに占領されてしまっていた。

適当な場所を探して歩いているうちに、荷物を載せることができるほどのちよつとした張り出しがある窓際の一角が見つかった。そこで明るくなるのを待つことにした。

空が白み始めたころには雨は小降りになってきたが、風はまだ強かった。構内の水も次第に引いていった。どうやら、戦災で破損していた屋根から大量の雨水が流れ込んだのが構内浸水の原因らしかった。

衣服は下着まで濡れてしまっているので、気持が悪くてたまらない。清は、汚れきった洗面所でちよろちよろと水の出る蛇口を見つけて顔や手足を洗い、口をすすぎ、水を飲んでやや生気を取り戻した。昨夜の出水で、枕にしていた雑嚢が水漬けになり、中に入れていた乾パンも水を吸ってふやけてしまった。あまり形が崩れていないのを選び出して一、二枚食べてみたが、さっぱり歯ごたえが無くてまずかった。

長剣の包みはトランクの上に置いていたので、水濡れはまずまず防げたはずである。しかし、トランクには水が入ってしまったに違いない。航空関係の図書や記録類などは水に濡れてしまっているだろう。今更どうするすべも無い。そのままにしておくことにした。

午後になって、不十分ながら衣服が乾いたところで、洗面所で体を拭いて下着を換えた。ついでに、汚れた下着や靴下を水洗いした。熱はひいたようだが、胸や腹のみみずばれを掻き過ぎて、血が滲んでいるところがある。

大阪駅では、結局三晩を過ごした。この間、食事は、駅前で商売を始めている闇の飯屋で雑炊を食べたり、米を握り飯に換えたりして過ごした。

九月二十日午後になって駅員に尋ねてみると、山陽本線の汽車も岡山までは動き始めているという。急いで構内を引き払ってホームに出た。しかし、一向に列車は入ってこない。一人になると用便に困る。折角列の前の方に並んでいたのに、荷物

を持つて後ろに下がらなければならぬ。ようやく列車が動き始めても、本数が少ないために、駅から送り出してゆく人数よりも、駅に集まってくる人数の方が遙かに多いようだ。この四日間にはわたる不通は、莫大な数の旅客の滞留を招いているのだらう。どっと集まってきた乗客が充満する構内やホームは異様な雰囲気包まれている。見る者に畏怖心を起こさせるほどの大群集は、列車が入って来る度にどよめきを上げて乗降口に殺到した。順番も何もあつたものではない。その状態は夜が更けてもなお続いた。

清がようやく乗り込むことができた時には、もう次の日になっていた。〇一五発の岡山行列車の車中は、当然のことながら体の向きも変えられないほど混雑していた。立ち通しで一睡もできないまま岡山駅で乗り換え、昼少し前に宇野駅に到着した。だが、ここでも極度の混雑が起きていた。連絡船乗船口前の広場には、何重にも折れ曲がった旅客の列が続いている。その最後尾に近いところに着いた清の耳に、乗船待ちの客の列の長さは四キロだ、いや六キロだ、などというやり取りが聞えてくる。午後一時発の便に乗れなければ午後五時発の便まで待たなければならぬが、夕方の便にも乗船できそうにない。

その時、乗客の列に近づいてきた漁師らしい男が小声で勧誘してまわり始めた。「高松へ早く渡りたい人はいないかな。このあたりに並んでいる人は明日になってしまふよ。一人十円だ。米なら割安にするよ」

清の前の二人連れの男がぼそぼそと話合っている。

「十円というのは、なんぼ何でも高過ぎる」

「十円あつたら、ちよつと昔なら、百姓家の一軒ぐらいは買えたからの」

しばらくして先ほどの男がまた回ってきた。

「今日は特別に奮発して五円にしとくが乗らないか。宿賃は倍以上かかるよ」

不安がないではなかったが、清は思い切つて利用することにした。復員軍人には鉄道は無料にしてくれていたから、随分無駄をしているような気がするし、人を出し抜くようなやり方は気が咎めた。だが、大阪駅での四日間米は使い果たしていた。今日は、岡山駅と宇野駅で水を飲んだだけで、朝から何も食べていない。ぐずぐずしてはられない。

七、八名の人々と一緒に男の後に付いて行くと、連絡船から大分離れた岸壁に、小型の漁船が一隻係留されている。既に十名余りの人々が乗っている。清たちが乗り込むと、船足は深く沈んで、舷側すれすれのところまで、海面がきいている。長剣を旅の最後のところで海に沈めるような事態になつては困るな、などと心配していたが、幸い、瀬戸内海は漣一つ見えないほど凪いでいた。次第に近づいてくる四国

の山並みが、もう見る機会はあるまいと思っただけに、ひどく懐かしいものを感じられた。約二時間で高松港に到着した。高德本線のホームへ行くと、徳島行の列車が入っていた。連絡船の到着を待っているのか、車内は閑散としている。清は、青森を出て以来、初めて汽車の座席に腰を下ろした。

列車は引き続き牟岐線を順調に走って、その日の午後早く阿波富岡駅に到着した。駅前で農機具の製造、販売をしている叔母の家に立ち寄って復員の挨拶を済ませ、一休みさせてもらった。叔母の家を出たのは午後四時半過ぎであった。生家の在る村までは約四キロの道のりがある。村に入るころには夕闇が敗残の身を覆い隠してくれるはずだ。

村への見通しを遮っていた山の鼻を回ると、清の家の含まれている集落の灯も見えてきた。その左端に見える灯が、紛れも無く生家のものだ。浩は安堵した。立ち止まって右手のトランクを下ろした。ふと、爆音に明け暮れていた女満別基地のことが脳裏に浮かんできた。空を飛ばなくなってから、まだ一月半ほどしか経っていないのに、それはまるで遠い別世界での出来事だったように思えてくる。

生家の門口に続いている檜の生垣の端まで来た時、夕闇の中を小走りに近づいてくる人影が、「清かえ」と小声で呼び掛けてきた。

「はい、只今かえりました」

母は、「お帰り……」とだけ言って、後は言葉をとぎらせると、浩の手からもぎ取るようにしてトランクを引き取った。母は、多分毎日のように、夕食が終わると、門先まで出てきて自分の帰りを待っていたのだろう。

先に立って土間に入った母は、「浩が帰ってきましたけん」と叫んだ。

祖父が、父を支えながら、茶の間から上がり、框暗かまち髷まで出てきた。二人は顔じゅうに笑みを湛えて清を見詰めた。

「只今帰りました」

清は、あらためて祖父と父とに向かって頭を下げた。

「ご苦労じゃったのう」

病気をしてから一層無口になった父が、弱々しい声ながら、ねぎらってくれた。

「よう帰ってきた。さあ、上がれ。上がれ。お前の家じゃ」

祖父が促した。母が夕食の準備をしているうちに、清は、包みを解いて長剣を取り出し、父の見守る前で祖父に刀を返した。

「有難うございました。この刀と一緒に、北海道の東の端まで行ってきました」

「まことにご苦労じゃった。この刀は、故郷の土をよう踏むまいと思うとった」

祖父は、両手で受け取った長剣に頭を下げて何事かを念じている。

それからの一時は楽しいものになった。主に祖父と両親の問いに清が答える形で話はずんだ。続きは明日にしようと話を持ち上げた時には、夜半を過ぎていた。

翌日は、主に隣り近所の挨拶まわりに費やした。陸軍へ行った小学校の同級生から四人もの戦死者や戦病死者が出ていることを初めて知って驚いた。そのことがきっかけになって、その夜は、清が不在中の親類、友人、知人などの消息に関することが主な話題になって、就寝したのはやはり夜半近くになってからだった。

誰かが呼んでいる。それに気づきながら、清はまどろみが続けていた。

「清、清、起きてくれ」

目覚めてみると、祖父が枕もとに座って清の肩を揺すっている。驚いて起き上がった。

「疲れているのに気の毒じゃが、手伝ってくれんか」

祖父がささやいた。

何事かと思ったが、急いで身支度をして祖父の後に従った。外はまだ暗く、夜明けの兆しさえ、見えてはいなかった。祖父は提灯に灯をいれると、先に立って井戸端へ行った。

「理由はおいおい話すが、まずは水嗜みず髷垢嗜み髷離嗜り髷をとって体を清めてくれ」

祖父は、先に立って着物を脱ぐと、つるべで汲み上げた水を頭からかぶった。清も、祖父にならった。祖父は、手拭から下着まで準備してくれていた。

水垢離が終わると、祖父は、納屋から重みのある袋包みを二つ運び出し、その一つを担ってついでくるようにと指示した。清が、その荷を右肩に担ぎ上げるのを見届けると、祖父は、清の荷より丈は短いかなり重みのありそうな袋を右肩に担ぎ、左手に提灯を提げた。

「これから前山の岩へ行く」

祖父は、小声で清に告げると、先に立った。

南面している生家の前面に見える山を前山と呼んでいたが、その標高百メートル足らずの尾根の近くに岩が在り、頂きは平になっていて二畳敷きほどの広さがあった。

岩への登り道の途中で一休みした。その頃になってようやく東の空が白み始めた。袋の中身については祖父は何も説明してくれなかったが、袋の形や手触りから、刀、それも家に有る刀の全部であると推察した。祖父は、家の刀を前山のどこか、多

分岩の近くに隠そうとしているのに違いないと推量した。清も、復員して来る道々、刀の処置をどうするかをあれこれ思案したが、日本占領軍が撤退するまでは地中に埋めて隠しておくのが無難で、場所も前山の岩陰あたりが最も良さそうだと思うようになった。

前山の岩に着いて肩の荷を下ろし袋包みを解くと、推察していた通り、中から刀が出てきた。昨夕、清が持ち帰ったばかりの長剣も混じっている。

「これから、うちにあるこの全部の刀を断ち切ってしまうおうと思う」

祖父は、岩の頂きに並べて置いた十二本の刀を見詰めながら静かに言った。

清は、思わず、えっ！ と叫んだまま、祖父の顔を見詰めた。

「近く刀狩りが始まるという噂がある。小松島航空隊にきている豪州軍の土産にするんじゃそうな。お前も帰ってきたことではあるし、なるべく早く処理した方が良いと思つてな」

「それなら、この山の中に隠しておきましょう。世の中も次第に落ち着きを取り戻してくるはずですよ。占領軍だつて何時までもいるはずがありません」

「言い抜けるはずがない。うちに刀があることや、お前が海軍の将校だったことは村の人は皆知っている。占領軍や警察の耳に入るのを防ぐ手立ては無いものと思わなければなるまい。それに、刀を出せと言われてから切ったのでは当てつけがましくなる」

「これまで、家宝じゃ、ご先祖の魂じゃと、ずいぶん大事にされてきたではありませんか」

「まこと、身を切られるようじゃ……。だが、やむを得まい。刀も、占領軍の土産になるようなことは潔しとはされんじやろう。ましてや、子孫が難儀する口実に使われるようなことは尚嗜なお嵩更嗜さら嵩お望みなさるまい」

咳くような小声だったが、祖父の決意は揺らいではない。

「お父さんは承知されたんですか」

祖父はしばらく口をつぐんだままだった。

「初めのうちは反対した。だが、刀のことで言いがかりをつけられて清が引つ張られるようなことにもなつたらどうするんだと言ったら、涙を流しながらやむを得んでしようと言ってくれた」

祖父が刀を切断する決意をしたのは、刀を難癖をつける材料とさせないための用心であることを知って、余計に申しわけなくなってきた。

「それでは、半分ぐらい処分して、大事なものは残すことにしてはどうですか。そうすれば、言いわけが立つではありませんか」

「わしも、最初は同じことを考えた。こういう具合に切断してしまいました、と見本を作つてごまかそうかと考えたこともある。だが、わしには芝居はできん。隠し事をしたり、後ろめたいところがあると、自然に態度に現れるものじゃ。家宝とは言いながら、刀のことで難癖つけられてお前を連れてゆかれては、それこそご先祖に申しわけがたん。お前を引つ張る口実は露ほども残しておきたくない。そのためには、こちらに少しでも引け目があつてはならんのだ」

今、世間には、いろいろな噂が流れている。現役将校は全員強制労働に使役されることになるとか、中には、全員去勢されるというのまである。清も、実態を正確に把握できるような情報も知識も持つてはいない。しかし、復員の旅の道々で見聞きしたところを元にして判断したかぎりでは、噂ほどの蛮行が組織的に行なわれているような気配を感じてはいなかった。

「戦死者の頭蓋骨を戦勝記念に持つて帰るような連中のことじゃ。最悪の事態を覚悟して対策を立てておく必要があるだろう」

祖父がそこまで事態を深刻に考えていることに驚いたが、それを考え過ぎと聞き流してしまふことはできないと思った。

「分かつてくれ。もし、来世というものがあるのなら、わしが向こうへ行った時に、ご先祖様にお詫びすることにするけん」

祖父は、自分が担いできた袋から、小型の鉄床かねしこと鉄鎚てつづい、それに柄の付いた鑿たがねを取り出した。岩の頂きの座りの良い所に鉄床を据えると、祖父は、東の紀伊水道から登り始めたばかりの太陽へ向かつて手を合わせ、祈りを捧げた。

「さあ、始めよう。これからだ」

祖父は、自分自身を鼓舞するかのようになつて、昨夜、返したばかりの長剣を取り上げて清に手渡した。一番後に回したい、そうすればそのうちに祖父の気持ちが変わるかもしれない、と思つている清の心中を見通したかのようである。

清は、祖父から指示された通り、鞘を払つて両手で柄元を握ると、刀身を鉄床の上に横たえた。刀身は、明け渡つたばかりの青空を映して澄んだ光りを放っている。昨日のうちに祖父は最後の手入れを刀に施してくれたようだ。

祖父は、左手に持った柄鑿えたがねを鏝元つばから二十五センチほどのところの刀身に当てた。

「ゆくぞ。しっかりと持っているよ」

祖父は、振りかぶつた右手の鉄鎚に力を込めて振り下ろした。

清は、思わず目をつむつた。鋼鉄と鋼鉄とが激しく噛み合う金属音が響き渡つた。祖父がこの岩を切断場所を選んでくれてよかったと思つた。もし、生家の庭でやつ

ていたら、音は隣近所にまで届いたに違いない。

清は、恐る恐る目を開いた。刀身を見ると何の傷痕もついていない。信じられない思いがした。〈やめてくれ！〉という叫びが喉を出る一瞬前に祖父ははや第二撃を振り下ろした。今度の打撃は前よりもはるかに強力だった。だが依然として刀身に変化はない。清は感嘆した。今やめれば、何でもなかったことになる。止めようと思つて祖父の顔を見上げた瞬間、第三撃が振り下ろされた。祖父の臉から飛び散つたしずくが、柄元を握りしめている清の拳を濡らした。

清は、ようやく祖父の決意を乱すようなことはすまいと決心した。そして、目をつむることなく刀の最後を見届けることにしようと腹を決めた。

第三撃が加えられると、鑿が当てられている付近の刀身に薄い曇りが生じて輝きが失われた。四撃、五撃、六撃と打撃が続くにつれて曇りが広がると共に、かすかだった打撃跡が刀身を横切つてくつきりと残る傷痕となつてきた。打撃回数が増えるにつれて、溝は次第に深さを増してゆく。祖父から言われて刀身を裏返した。裏面から更なる打撃を数回加えると、遂に刀身は二つに分かれた。

祖父は、鎚と鑿を置くと、大きく息をついて岩の上に座り込んだ。懐から取り出した手拭を顔に当てたまま、長い間額の汗を拭う仕事を続けていた。二つに切断された日本刀は、優美さと精悍さを失つて、もはやいびつな切断面をさらす鉄屑と変わるころはなかった。

次の刀の切断には、清が鎚を振るつた。二人で役目を交替しながら十二本の刀の切断を終えたのは、午前十時に近かった。

祖父は、長剣の刀装だけは元のまま残した。切断した刀身の先端部も用意した白布に包んで他の断片と別にした。祖父は何も言わなかったが、長剣も切断したことを示す確かな証拠を残したのであると推量した。

刀身の切断片は袋に入れて清が担ぎ、鏢などの刀装類と鉄床などは祖父が担いで先に立った。山を下りる祖父の足取りは、登ってきた時のような確かさを失つていくように感じられた。清は、祖父が受けたに違いない打撃の大きさが気掛かりだった。

戦後五年ほど経つて祖父が八十三歳を迎えた時、長剣以外の刀の断片は前山の岩の麓に埋めたと教えてくれた。祖父はいざという時に切断したことを証明することができるようにその後も切断片を保管していたようだ。

「長剣は、江田島、霞ヶ浦、千歳、女満別とお前と行動を共にしてきた。だから、お前の手で葬つてあげてくれ」

と袋にいれたまま手渡ししてくれた。だが、いざとなるとためらいが生まれて実行を先送りすることが続いた。だが、刀を大切にしているかというところ、そうではない。刀袋を目にすると、刀の生命を断ってしまった時のことを思い出す。それが辛いから、できるだけ奥の方にしまいこんで、目につきにくくする。結局、無関心に埃の中に放置し続けていたのと変わるところはない。

*

長い年月にわたる怠慢の積み重ねが、今日、無惨な刀の姿を家族に見せつける羽目になってしまった。半世紀にも及ぶ年月の錆の層の分厚さを想像すると、いたたまれない気持がする。清は、まるで、老い衰えた自分の裸体を人前にさらすのに似た羞恥を感じている。

清は、息を止め、両の手に力を込めて鞘を払った。固く錆び付いていると思ったのに、刀身は抵抗感なく抜けた。だが、悲鳴や驚きの声が同時に上がって、切断された刀身の異様さが一同を驚かせた。

「どうしたんですか、これは……」

浩介は、あっけにとられた様子で、視線を刀と、清との双方へ行き来させている。

「全然知らなかったわ、こんなになってるなんて……」

由美子もあっけにとられている。

恵理も、両の掌を頬に当てたまま、眼を見張っている。

清自身も唾然とした。想像していた状態とはまるで違う。錆がまったくと言ってよいほど認められない。僅かに鍔元近くに小指の先ほどの曇りが目にとまるだけだ。刀身は、鋼鉄の輝きを維持して冴えた冷たい光を放っている。切断面にも少しの錆も無い。保管場所が湿気の少ない公園住宅の四階の天袋であったためかもしれない。だが、四階でも、台所用品や文房具などの中には、注意をしても錆びしてしまうものもある。

「そういうことなら、この刀のお甲いをしなければいけませんね」

刀の歴史について清の説明を聞き終えると、浩介がしみじみとした口調で言った。「いや、お甲いはやめましょう。このままの方がいい。その方がひいおじいちゃんのお気持が正確に伝わってくるような気がする。いいでしょう」

息子の言葉は、胸にこたえたが不快ではなかった。浩介の方が自分よりも正確に祖父の気持を理解してくれているように思えてきた。

「まかせるよ」

清は、刀身を鞘に納めて浩介に手渡した。

受け取った浩介は、あらためて先端部のない長剣を抜き放って秋空にかざした。

それを見た雄太が「すごいねえ」と、まるで大人のような口調で嘆声を洩らした。

いびつな切断面をさらす刀身は、醜さの表徴ではなくて、乱戦の激闘を切り抜けてきた太刀の面影を彷彿とさせているように清は感じた。